

## 浜松地区講習会報告

### 第1回 地区講習会

①日時 令和7年6月21日(土) 9:30~11:30

②オンラインにて実施

③講習内容 講演「音韻の発達と音韻認識」

講演者 大阪教育大学 総合教育系教授 高橋登 先生

#### <講演内容と感想>

##### ○講義内容

- 1 音声の発達
- 2 構音の発達とその誤り
- 3 日本語の音韻の特徴
- 4 音韻意識
- 5 音韻意識の役割



##### ○参加者の感想

- ・子どもの音韻がどのように発達し、どのように認識していくのかを丁寧に分かりやすく説明していただいた。発達の仕組みが理解できた。
- ・なんとなく理解していた内容を学び直すことができた。子どもたちの支援を考えていくうえでとても参考になった。
- ・支援を考えるときには「弱いところを伸ばす」とことと「合理的配慮でつまずきを減らす」ことの両方が必要であることを感じた。
- ・支援とはスキルを身に付けさせることだけではなく、子ども自身が自分は自分で大丈夫だと自分にOKを出せることが大切だというお話が印象に残った。
- ・子どもたちとよく話し、よく考えさせ、子ども自身で乗り越える力を身に付けさせたい。
- ・子どもたちに考えさせるためには、指導をパターン化せず、柔軟性をもって対応することが大切だと分かった。育って欲しいところを刺激していくことを意識して支援をしていきたい。

## 第2回 地区講習会

- ① 日時 令和7年 7月5日(土) 13:00~15:00
- ② 場所 浜松市教育センター
- ③ 講習内容  
講演 「得意なところは伸ばし、苦手なところは補いましょう part3  
～得意と苦手の神経心理学的なアプローチから～」  
講演者 児童発達支援センター「エンジョイ・ウェルヴィレッジ」  
センター長  
元浜松学院大学短期大学部 教授  
志村浩二 先生(臨床心理士・公認心理師)

### <講演内容と感想>

発達の3つのアンバランスについて、軽妙な語り口で、実演を交えながら、詳しく講演していただいた。

発達のアンバランスの1つ目は、聴覚のアンバランス。聴覚のアンバランスとは、カクテル・パーティー効果(音声の選択的聴取)が働きにくい状態のことだ。生まれつき、このアンバランスをもつ人は、50人中2、3人いるようだ。本人は、一生懸命聞いていても、周りの全ての音が同じように聞こえてしまうため、授業中の先生の声など、特定の音を選び分けて聞くことが大変難しい。そのことを理解していない周りの大人が、何度言っても話を聞いていないと叱責することで、自己肯定感の低下やキレるなどの二次障害を発生させてしまう。

対策として、周りの大人が、児童の抱える困難さの根底にあるものを正しく理解することが大切だ。聴覚のアンバランスに対しては、声だけの指示ではなく、教科書を指さしながら指示するなど、目と耳をセットにする支援をすることが効果的である。

発達のアンバランスの二つ目は、視覚のアンバランス。視覚のアンバランスとは、大事なものを見て選び分ける、視覚の選択的注意が働きにくい状態のことだ。一つのことを注視することができず、全てのものが同じように目に入ってしまいうため、常に興味のあるものを追いかけて、動き回ってしまう。視覚の選択的注意の悪さが行動面に現れるとADHDと診断されることがある。ADHDとは、きょろきょろソワソワして(注意欠陥)動き回る(多動)行動が、周囲の人が認められる幅を超えている(ディスオーダー)状態のことをいう。周囲の人が認められる幅は、個人の価値観によって異なるため、医者にとって診断が変わることがある。視覚の選択的注意の悪さが認知面に現れると、算数障害・読字障害・書字障害のLD(限局性学習症)と診断されることがある。文字や図形を理解するためには、視覚の選択的注意が必要だ。これが働かないと、一行が分からない、文字ではなく空白が浮かび上がる(空白反応)などの症状が現れる。それによって、図形が分からない(算数障害)、文字が読めない(読字障害)、文字が書けない、バランスが悪い文字を書く(書

字障害)状態になってしまう。周囲の大人が理解せず、叱責することで、二次障害を発生させてしまうことがある。

対策としては、色を付けたり太字にしたりすることで特定の文字を見えやすくする、いらぬ刺激を取り除くなどの構造化をすることが大切だ。

発達のアンバランスの3つ目は、身体感覚のアンバランス。身体感覚のアンバランスとは、身体図式(ボディスキーマ・自己の身体を認知するための無意識下の仕組み)がうまく働かず、距離感や力加減が分からないなど極端な不器用さがある状態のこと。近年では、発達性運動障害(DCD)と呼ばれている。狭いところで動いたり、何かに掴まったり、はしごを登ったりすることが著しく苦手である。発達性運動障害は、小学校くらいまでは大変苦勞し、生涯治ることはない。しかし、成長するにつれて身体感覚のアンバランスがあっても、学習や人間関係などほかの要素が大きくなるため、人格に占める影響の割合は少ない。つまり、小学校でのフォローが大切だということだ。

今回、発達のアンバランスについて講演をしていただき、志村先生の「診断より支援が先」という言葉が大変印象に残った。私たち教員は、困った現れがある子どもを、すぐに病院にいったり診断をもらおう、愛着障害ではないか、親の育て方が悪いのではないかと、考えてしまいがちだ。しかし、大切なのは、目の前の困っている子どもを、今、どのように支援していけばよいかを考えることだ。診断や原因追及はその後で十分できる。今回志村先生に教えていただいた支援の方法を、早速試していきたいと思う。また、二次障害を防ぐためには、教師や親など、困っている子どもの周りにはいる大人が、苦手なことがあっても、あなたは全部で見ればすばらしい、いいところをたくさんもっていると伝え続けることが大切だと思った。

とても楽しく、あっという間の2時間の講演だった。今回学んだことを、今後の通級指導に活かしていきたいと思う。



### 第3回 地区講習会

- ① 日時 令和7年 9月6日(土) 9:30~11:30
- ② 場所 浜松市教育センター
- ③ 講習内容 講演「構音指導・吃音指導」  
講演者 ことばの相談室いちご 言語聴覚士  
石野千鶴先生

#### <講演内容と感想>

#### 1. 機能性構音障害の基礎知識

#### 2. 吃音について RASS の考えに基づく環境調整法

「構音指導」については、機能性構音障害の基礎知識についてお話をしていた。カ音の指導は、「うがいをしてカ音を出そうとすると咽頭破裂音になる可能性がある」ということは、知っておく必要があると思った。カ音の指導で、口を大きく開けた状態で「ン」、「ア」と言ってからカ音を出すのが一番よいことが分かった。また、口の体操について、本当に必要なのかどうか、直接的な発音指導に重点を置いた方がよいのではないかと疑問をもつことができた。食べることが構音障害の改善のために大事なことも分かった。

「吃音指導」については、RASS の考えに基づく環境調整法があるということ、今回初めて知ることができた。吃音の場合は、親がしっかり受け入れてあげることが大切なことが分かったので、保護者にアドバイスしたいと思う。本人が、気にせず過ごすということも大切だと感じた。吃音を本人が理解することが大事なことも分かった。メンタルリハーサル法をできることからやってみたい。石野先生の「本当に治る。」という言葉が、心強いと思った。

今後に生かして、指導を頑張っていきたい。



#### 第4回 地区講習会

- ① 日時 令和7年 10月4日(土) 9:30~11:30
- ② 場所 浜松市 教育センター
- ③ 講習内容 講演「ビジョントレーニング3 ～幼児期からのアプローチ～」  
講演者 みんなの心理相談室、目と体の発達教室コンテ代表  
桐生大輔 氏

#### <講演内容と感想>

今回は幼児期の子供たちに対してどのようなアプローチをしていくとよいかについて、ワークを交えながら、またいろいろな教材を紹介していただき、体験も行いながらの講演だった。

紙を使うものであっても、指を使って「なぞる」「指を動かす」「さがす」などの活動を行うことで、見ることや手と目の協応の力を伸ばすものをたくさん体験させていただくことができた。幼児を対象とするため、書くことではなく、手を動かすための紙の使い方を体験させていただけた。

右手と左手を動かす場合、対象となる動きができるのか、同じ方向へ動かすことができるのか、などどのようなところに注目するとよいのかも教えていただいた。そして、指示を聞いて何かをすることで、動作と言葉がマッチングされる、そこが言葉の始まりである、ということや、初めてやることには失敗はない、だから失敗を恐れる子でも初めてやることには取り組むことができる、などの言葉もあり、改めて認識できたことが多くあった。

紙を前にすることは座ることが必要になるため、座ることで思考をすることができる、ということも教えていただき、座ることの大切さを知ることができた。

今回で3回目となるビジョントレーニングの講演会であるが、毎回新しい内容、新しい教材を教えていただいている。教材に関しては、使うものは身近にあるものだが、使い方を工夫することで、いろいろな力を育てることができることを、実際に教材に触れることで学ばせていただくことができた。

大変充実した2時間となった。



## 第5回 地区講習会

- ① 日時 令和7年10月18日(土) 13:00~15:00
- ② 場所 浜松市教育センター
- ③ 講習内容 実技研修「通級指導教室における Chromebook 活用例の紹介と操作練習」

指導者 浜松市立天竜中学校 教諭 近藤 充 先生

### ＜研修の内容と感想＞

浜松市内の学校で児童生徒が使用している Chromebook を使用し、AI を活用した教材作成例、デジタル教科書の有効活用例、「Figjam」での教材作成例などを教えていただいた。

AI を活用した教材作成では、実際に「ChatGPT」を利用して、『聞くカトレーニング』の例題をもとに類似問題を作成したり、『走れメロス』の本文要約や画像作成の手本を見せていただいたりした。また、「野外活動でよくあるトラブルと対応例」など、通級指導で使えるような題材例もいくつか紹介していただいた。



デジタル教科書の有効活用では、教師用デジタル教科書(英語)の「フラッシュカード」「words」など、通級での活用が有効だと思われるデジタル教材を紹介していただいた。ただ、生徒用デジタル教科書では利用できない教材も多いため、LD等の生徒が自ら学びやすい方法については、さらなる教材研究が必要である。



「Figjam」での教材作成では、書字が苦手な生徒の漢字学習として、テキストや付箋で作成しておいた漢字から正しい漢字を選んで解答欄に貼り付ける教材の作成方法などを教えていただいた。通常学級の授業での意見共有としての利用が多いイメージの「Figjam」だが、通級指導での利用例を知ることができた。

一般的なICT研修会は、学級での一斉指导向けの内容になることが多いので、このような機会に通級指导向けの研修が受けられることは大変ありがたい。今回は、他地区からの参加者もあり、Chromebook研修のニーズの高さや、ポケットWi-Fiの整備など他地区とのICT環境の相違を感じた。通級担当同士の情報交換の場としても貴重な時間となり、有意義な講習会となった。